児童期から思春期の自己概念に対するソーシャルサポートの影響
ーサポートの送り手の要因を考慮してー

専　　攻　　人間発達教育
コ ー ス　　教育コミュニケーションコース
学籍番号　　M14001H
氏　　名　　泉　　美穂

【研究目的】

子どもの内的状態を知る上で、自己概念を理解することは重要な手がかりとなる。特に児童期から思春期にかけては、自己概念が発達する時期であり、教師はその時期の子どもの自己概念の変化を理解する必要がある。さらに、実際の児童・生徒一人ひとりと関わる教師は、自己概念に対して、どのような関わりが影響を及ぼすのかも知る必要がある。

この問題意識から、本研究では、以下の３点について検討した。

(1)児童期から思春期における自己概念の学年・性別における様相。

(2)自己概念の 5 つの下位尺度とは独立して存在するとされる全体的自己価値（Harter, 1985）を形成するにあたりどの領域が影響を及ぼしているのか。

(3)自己概念と他者との関わりとの関連を検討するため､｢重要な他者(保護者･友人･教師)｣からのサポートが自己概念の形成にどのような影響を及ぼしているか。

【調査】

(1)対象：兵庫県の小学４年生、小学６年生、中学２年生 613 名に対して調査を実施し、うち回答を得たもので回答に不備のなかった 568 名（男子 285 名、女子 282 名）。各学校種・性別の割合は、小学 4 年生 160 名（28%、男子 76 名。女子 84 名）、小学６年生 143 名（25%、男子 77 名。女子 66 名）、中学 2 年生 264 名（46%、男子 132 名。女子 132 名）、有効回答率は 93.4%。

(2) 調査時期：2015 年 9 月

(3) 手続き：小学校および中学校における質問紙調査を行なった。学級担任によって、質問項目を読み上げる形で一斉に実施された。

(4) 調査内容：**①自己概念尺度**：Harter（1985）の日本語版（眞榮城，2007）。36 項目それぞれについて「とてもそう思う」～「全然そう思わない」の 4 件法で回答を求めた。**②ソーシャルサポート尺度**：ソーシャルサポートの内容およびサポート量、サポートの送り手を測定する尺度（細田・田嶌，2009）を使用。15 項目それぞれについて、「きっとそうだ」～「ぜったいにちがう」の 4 件法。

【結果】

(1) 信頼性の検討

自己概念尺度は学業能力、運動能力、身体的外観、社会的受容、道徳性、自己受容感、全体的自己価値によって構成した。ソーシャルサポート尺度は、サポート対象者別にサポート内容を合計し、保護者・教師・友人サポートによって構成した。

(2) 自己概念の下位尺度得点についての検討

学年・性差

自己概念尺度の下位尺度について、学年段階

を要因とした二要因分散分析を行なった。児童期から思春期における自己概念の全ての下位領域における自己評価は、小学４年生頃から低下することが明らかとなった。「学業能力」、「社会的受容」、「運動能力」、「身体的外観」、「全体的自己価値」の下位領域については、男子の方が女子よりも自己評価が高かった。一方、「道徳性」においては、女子の方が男子よりも小学４年生と小学６年生で自己評価が高かった。

(3) 自己概念の５つの領域と全体的自己価値との関連

学年・性別に、全体的自己価値を目的変数、自己概念の５つの下位尺度（「学業能力」「運動能力」「身体的外観」「社会的受容」「道徳性」）得点を説明変数とする重回帰分析を行った。小学４年生において、男子では「学業能力」「身体的外観」「道徳性」が有意であった。女子では、「身体的外観」「道徳性」から「全体的自己価値」が有意であった。

小学６年生において、男子では「身体的外観」が有意であった。ただし、「道徳性」に関しては、有意傾向がみられた。女子では、「運動能力」「身体的外観」「社会的受容」「道徳性」が有意であった。

中学２年生では、男女共において、「身体的外観」「社会的受容」「道徳性」が有意であった。

(4) 自己概念の６つの下位尺度へのソーシャルサポートの送り手からの影響

学年・性別に、自己概念の６つの下位尺度を目的変数、ソーシャルサポートの送り手を説明変数とする重回帰分析を行った。

小学４年生男子では、「身体的外観」「社会的受容」「全体的自己価値」に対する、保護者サポートだけが有意に寄与していた。小学４年女子については、「運動能力」および「身体的外観」に対して教師サポートからの寄与が有意であった。「社会的受容」については友人から、「道徳性」については保護者からおよび友人からの、「全体的自己価値」については保護者からのサポートが有意であった。

小学６年生男子においては、「学業能力」「社会的受容」「道徳性」「全体的自己価値」に対する、保護者からのサポートが有意に寄与していた。小学６年生女子では、「社会的受容」「道徳性」に対して友人サポートが有意であった。「全体的自己価値」に対して保護者サポートが有意であった。

中学２生年男子では、「道徳性」「全体的自己価値」に対して、保護者サポートからだけが有意に寄与していた。「社会的受容」に対して、友人サポートが有意であった。中学２年生女子において、「道徳性」「全体的自己価値」に対して保護者サポートが有意に寄与していた。「社会的受容」に対しては、教師サポートおよび友人サポートが有意であった。「身体的外観」に対しては、保護者サポートおよび教師サポートが、「運動能力」に対しては保護者サポートが有意に寄与していた。

(5) 総合考察

児童期から思春期の自己概念に対して、保護者からのサポートが最も影響していることが明らかとなった。また、友人からのサポートも「社会的受容」において有効であることが分かった。教師からのサポートにおいては、領域によって有意な相関がみられた。このことから、影響がある領域に対して、保護者や友人からのサポートを受けることができるような教師の働きかけが有効になると考えられる。

主任指導教員　中間玲子
指導教員　　中間玲子